

<序論>

研究動機・先行研究の検討・研究目的・研究方法

ハンドボールは、2チームによって行われ、それぞれ7名（CP6名、GK1名）のプレイヤーで構成される。数多くの攻撃と防御を繰り返す中で制限時間内に相手ゴールにより多く投げ入れた方が勝者となる集団スポーツである。その中でも、同一のゴールキーパーやシュートコースであっても様々なシュートを観察することができることに強い興味や関心を抱いていた。そして、これまで主に右サイドというポジションを任せられ、シュートの向上に努めてきた。しかし、それは試行錯誤する段階に止まり、研究という域には達していなかったため、この機会を通じて研究を深めたいと考えた。日々の練習の中でも、サイドシュートが入らない時がある。その際に、サイドシュートの達成のために自らシュート角度をつくったり、腕の使い方などのサイドシュートの運動の構造が大きく関係しているのではないかと考えた。そこで、より質的な視点で運動観察を行うことができる運動モルフォロジー的考察法を用いての研究をすることで新たな知見を見出したいと考えたこと、そしてこの考察法を用いての研究があまりなされていないということから、今回の研究を進めることとした。

本研究の目的は、ハンドボール競技における左利きの右サイドシュートについて既存の構造体系を検討した上で、典型的なサイドシュートの構造特性を明らかにし、実際のサイドシュートの運動の組合せを類型化していくことである。更には、そこで見出された新たな課題に示唆を与えることで、今後の競技生活に生かすと共に、指導の面でも生かせるものにしたいと考える。その方法は、マイネルの運動学における運動モルフォロジー的考察法を用いる。その際に、サイドシュートの場面をビデオ編集し、フィルムを用いて印象分析を行うことでサイドシュートの運動を間主観的客観により捉えるものとする。具体的には、大学という一番伸びしろが期待され、プレイが魅力的である平成23年度全日本学生ハンドボール選手権大会における試合を原資料とし、典型的場面として把握できるサイドシュートを考察場面として抽出し、分析・考察を行うこととする。

<本論>

第一章 ハンドボール競技の構造特性

ボールゲームの一般理論（G. シュティラー、1993）に基づく、ハンドボールはチームスポーツ種目に属し、ボールを手で相手チームのゴールに投げ入れることにある。また、肉体的、体力的領域だけではなく、精神的、道徳的領域においても競技能力として発揮することが望まれるボールゲームである。また、「投げる」形態（金子、2007）に基づく、ハンドボールは目標投げの形態をとることが多く、助走や跳ぶなどといった動作と組み合わされて行われることもあるので、構造化が複雑に絡み合っているといえる。そして、サイドシュートにおける運動の構造の特性（大友、2011）においては、様々な局面をとり、1つ1つの運動が密接に関わっているため、一連の組合せによってサイドシュートが形成されている。よって、どの局面も必要不可欠であるといえる。

第二章 ゲームの運動観察法

ここでは、試合分析の中から運動モルフォロジー的考察法を用いることにしている。その際に、運動共感へとつながる他者観察の不可欠な前提条件となる印象分析を行い、サイドシュートを捉えるのに、より有効的と考えるマイネル（K.Meinel）の「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動伝導」、「運動の先取り」、「運動の正確さ」の5つのカテゴリーを中心に、サイドシュートの運動の構造を理解していく。モルフォロジー的考察法は、印象分析のなかに隠されている事実や徴表や関係を確認させてくれるだけでなく、運動の“本質”を見抜くことにつながる。また、印象分析を行う際には、主観的な運動観察ではなく、間主観的客観の立場から運動観察を行うために「共同観察」（佐藤、2002）によって共通項を抽出し、研究を進めた。また、類型化とは、個々の存在あるいは現象の間の類似点を抽出し普遍化することでいくつかの集まりに区分すること、典型とは、同類のものの中からある事物の特徴をもっともよく表すもの、分類とは、ある事物を様々な特徴によって区分していくことである。つまり、これらを行うことは、サイドシュートについて運動の構造や形態、特徴を知る

ことにつながり、指導する際にも知見という引き出しをいくつも呈示することにつながるため、重要な示唆を与えてくれる。

第三章 ゲームにおけるサイドシュートの構造体系

この章では、既存する左利きの右サイドシュートの構造体系を検討した上で、全日本学生ハンドボール選手権大会におけるサイドシュートの場面を抽出し、それらの印象分析と考察を行い、既存の構造体系に示唆を与えた。抽出した7つの典型的な場面は「ノーマルオーバースロー型」、「ノーマルサイドスロー型」、「ノーマルアンダースロー型」、「ノーマルインナースロー型」、「インナーアウトオーバースロー型」、「インナーアウトサイドスロー型」、「インナーアウトアンダースロー型」である。これらを上記の5つのカテゴリーを基に類型化し、既存の構造体系との比較から新たな課題をみつけることができた。以下のことが示唆できると考える。

- 助走：ボールをもらう前と後で行われる。前に行くことはボールが来ることを“先取り”し、よりシュート角度をつくることことができる。後に行くことは踏み込み、踏み切りでの助走を生かして主要局面に入る。また、浅い位置と深い位置で行われる。浅い位置はパスをもらってから最短距離でシュートまでいける。深い位置はシュート角度をよりつくることことができる。
- 踏み込み、踏み切り：左、右の順と右、左の順、両足、そして空中で行われる。左、右はシュート体勢を作りやすい。右、左は最短距離でシュートまでいける。両足は強い踏み切りで主要局面へいける。空中はDFの干渉なしに主要局面へいける。また、0歩から3歩の歩数がある。0歩はすぐに主要局面へいける。1、2歩は助走での勢いを主要局面へつなげやすい。3歩はシュート角度を大きくつくることことができる。
- 投げようとする：片手、両手で行われる。片手はシュートまでのリズムやコースを容易に変化できる。両手は安全なテイクバックとなり、安定感が増す。また、テイクバックは半円を描く頭の反対側、あるいは頭左横（上）とキャッチと同時に頭左横（上）、あるいは頭前で行われる。前者はDFをかわし、ねじれ動作を生みやすい。後者はDFをかわし、より早く主要局面へいける。また、高い打点から様々なコースに打ち分けやすい。そして、体の倒しの有無がある。倒すことはキーパーをかわすことにつながり、左と右がある。そして、シュートフェイントを行うことは、キーパーの“先取り”を誤ったものにする。
- 投げる、投げた：既存体系にあるオーバースロー、サイドスロー、アンダースローに加え、スピンドで行われる。スピンドには時計回りと反時計回りがあり、地面にバウンドさせた際に軌道を変化させる。
- 着地：右、左の順と左、右の順、そして両足で行われる。片足ごとの着地は衝撃を順番に受け止めることことができる。両足は、受け身の腹這いと大きく関わっている。
- 受け身：伴いの有無がある。伴う場合は左手（右手）、お尻、腰、背中という順次接触と両手（片手ずつ）、お腹（腹這い）という順、そして前転、後転、側転で行われる。片手からの受け身は順次接触により怪我の防止となる。両手（片手ずつ）からの受け身は前のめりになっている状態からの衝撃を受け止めることことができる。前転などのように回転することは、衝撃を緩和させることことができる。

<結論>

本研究では、サイドシュートについて運動学的視点から質的に捉えることにより、サイドシュートの構造特性を明らかにすることができた。その中で、サイドシュートのそれぞれの局面の構造体系を明らかにし、新たな類型を呈示することができた。サイドシュートのどの局面をとっていても、シュート成功という目的達成と深く関わっており、1つ1つが重要な役割を担っていることを再確認することができた。以上からサイドシュートの構造を成す上で多くの引き出しがあることが伺え、この引き出しを多く持つことが自分の運動の可能性を広げることにつながるためである。そのためにも、練習において実践し、“正しい運動”を身に付けていくことが必要であり、それが自動化につながるためである。また、“正しい運動”を身に付けることは指導者として“正しい運動”を伝えていくことにもつながる。運動全体を捉える中で、運動の“本質”を見抜き、間主観的に運動を捉えることで像を持ち、“正しい運動”を伝えていけるものとする。今後の課題としては、運動の正しさを見抜き、指導できる体系を持つことを挙げたい。

（引用・参考文献省略）